



# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第44号

(2016年6月)



のみならず、言語をもって組み立てられた文芸は、他の芸術を以てしては到底、表現することの出来ない多くのものを表現することが出来る。例えば人間の情緒を表わすことは、他の芸術の感覚的な形態によって或る程度までなしうるにしても、人間の持つ情操豊かな思想、意見、随想等は文芸にのみ独得のもので、それを感覚的な他の芸術が表わすことは不可能であると言って差支ない。

そうして見ると、文芸は特別に自由な芸術であると見ることが出来る。それは他の芸術のなしうることを観念化することにより、言語により表わすと共に、他方、他の芸術のなし得ないものを表わすことも出来る。しかしそれだけ、それが誤って一步足を踏み外すと、芸術としての地位を失う危険性のあることも認めなければならない。

田部重治著『文藝の理念』より(詳細は4頁から)

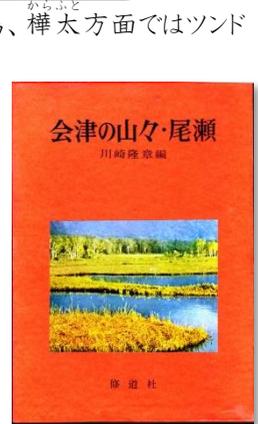
北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼



尾瀬国立公園・田代山ハイキング

田代すなわち湿原は東北、北海道の多雪地に発達し千島、樺太方面ではツンドラとして発達しているが、関東の尾瀬地域にこのような湿原地帯の発達していることは驚異的であり学問的にも貴重であるが、このように北国と隔離分布する湿原地帯の存在ならびに北国性植物の発達は、植物においては季節風や渡り鳥による種子の運搬も考えられるが、日本がかつて掩われていた氷河期に北国性植物が南下し、現在より広く四国、九州まで連続分布していたものがその後の気候の温暖化により多くの場所が絶滅しても、現在でもその生育に適性をみる環境を持続する尾瀬地域に生きのこって、現在のような姿を保っているものとの考察がある。



川崎隆章編著『尾瀬と会津の山々』(昭和36年5月20日、修道社発行)より

道路事情の安定している会津側のルートをたどり、湯ノ花温泉から田代山林道を進んで猿倉登山口に車を置き、田代山山頂に登って湿原を散策し、同じ道に戻ります。山頂まで1時間45分、とありますが、自然観察しながらの登山ですのでその倍くらいかかる見込みです。アプローチに2時間かかりますので早出とします。帰りは遅くなりますので、有権者の方は参議院選挙は必ず前日までに期日前投票を済ませてご参加下さい。

日時：7月10日(日) AM5:00 北小西門集合

行程：鹿沼(北小) 5:10——土沢 IC——今市 IC 7:30・11:30 5:50——  
 山王峠——会津高原駅——湯ノ花温泉——猿倉登山口(標高1390  
 m) 8:00…(15分)…水場…(60分)…小田代湿原…(20分)  
 …田代山湿原入口…(10分)…田代山(標高1926m)…(15分)  
 …田代山避難小屋……猿倉登山口——湯ノ花温泉——今市 IC——  
 土沢 IC——鹿沼(北小)

※ 本号の発行遅延のため募集が間に合いませんでしたが、簡単に内容を紹介させていただきます。

☞ その他の予定 ☜

※ 7月24日(日) 女峰山登山

——元鹿沼市教育長・西山義信氏の喜寿を祝う会——

AM4:00 クリーニングハウスあべ集合

志津……馬立……女峰山……帝釈山……富士見峠……馬立……志津

※ 7月31日(日)～8月1日(月) 男体山登山

——日光開山1250年記念登山——

PM5:00 クリーニングハウスあべ集合(車中泊)

日光二荒山神社中宮祠……男体山(奥社)……志津小屋

※ 中宮祠1274mと男体山2486mの標高差1212m、志津小屋1785mと男体山の標高差701m、と下りは急斜面を中宮祠に下るよりも志津小屋に降りた方が標高差500mほど楽ですので、阿部が中宮祠から車を志津小屋に回します。ただし、志津小屋への下降路は深く掘られて溝状になっています。

※ 7月31日(日) 雑木林の昆虫観察 AM5:00 北小西門集合

※ 8月7日(日) 水の生き物観察 AM8:00 北小西門集合

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774 (阿部)

☞ 本号の内容 ☜

山行案内	尾瀬国立公園・田代山ハイキング	2
その他の予定		3
表紙の本	田部重治著『文藝の理念』	4
活動報告・1	奥多摩、鷹ノ巣山ハイキング	20
活動報告・2	新緑の夕日岳ハイキング～鹿沼の最高地点(1526m)をめざして～	25
山口さんの自然講座	ニフトコの思い出・余震はなぜ起きる・地震は予知できるか	28
愛書家のひとりごと	「文芸の効能」	31
山書談話室		32

田部重治著『文藝の理念』  
 (昭和22年6月25日・八雲書店発行)

文芸と他の芸術との相違点

文芸は幾つの種類に分たれるか、又、分たれうるかの問題については、既に述べるところがあった。これから文芸の特質に就いて述べる前に、それが他の芸術と如何なる点に於て異なっているかが明らかにされなければならない。文芸の特質は、それが他と異なる点をはっきりすることによって、一層、明らかにされる。茲では文芸の特質が、それと最も縁の近い絵画や音楽の特質と、如何なる点に於て異なるかを述べて見たい。何となれば、絵画や音楽の特質は、文芸のそれと最も混同され易く、時には文芸の取るべき道を混乱にまで導くと信ずるからである。

文芸に就いて最初に考えられる特殊性は、既に述べた通りそれが言語の芸術であるということである。そしてこの言語は特殊のものである。文芸と他の芸術との大きな相違点は、言語というものの性質が、他の芸術の表現の媒介となっている色彩や線、立体的形体、音響などとの性質の相違から来ている。言語以外のこれ等の媒介は、何れもわれわれの感覚にうったえるものであるが、文芸の表現機関である言語は、それ等とは大分性質を異にすることが分る。言語も感覚にうったえぬとは言えないにしても、そのうったえる仕方は、音楽のもつ音響の感覚にうったえる仕方や、色彩、線の感覚にうったえるそれとは異なっている。

若し言語が感覚的要素をもつとすれば、それは朗読されてもされなくても、耳にうたえるものだろうとは、先ず誰も考えるところである。その点に於て音楽と似ているように見える。しかし音楽の音響は音楽という芸術に取っては、それ自身独立性をもつ本質的なものである。従って音響の性質、その長短、その抑揚の巧拙は、音楽それ自体の巧拙を決定する。これに反して、文芸の作品に於ては、そうしたことが考えられない。文芸の作品を誰が朗読しようと、これが巧みに朗読されようとそうでなかろうと、その作品としての本質的価値は、単なる音響の芸術的価値とは独立せる法則によっている。つまり音楽に於ては演奏の巧拙は、音楽それ自体に直接の影響を齎すが、文芸に於ては、朗読的、音響的価値は、文芸それ自体に於ての言語の意義との関連に於てのみ見出される。従って単なる音響それ自体の価値は文芸に於ては二義的であ

る。

文芸の媒介である言語が、文字という符号をかりて現われることも感覚的であると  
言えるかも知れない。この場合でも絵画が感覚に翹える仕方とは、全然、異なってい  
ることが分る。即ち絵画に於ての感覚的要素である色彩や線の配合の巧拙は、直  
接に絵画それ自体の巧拙になるのであるが、文芸に於ては、それが人間の手で巧  
みに書かれてあろうと、下手に書かれてあろうと、又、印刷にされてあろうと、そんなこと  
は問題にはならない。問題になるのは言語の法則による独得の配置であり、それがも  
つ意味との調和に於ての感覚の与うる感じであり、絵画のもつ所謂感覚的要素とは  
大分趣きを異にする。

文芸は言語を媒介とする芸術であるが故に、作者のもつ感情や思想が、言語を  
通じて顕われなければならない。従ってそれは絵画の如く二次的空間若くは彫刻の  
如く三次的空間を通じて、又、音楽の如き純粋なる音響の旋律によって表わされる  
のでなくて、言語の形式を通じて現われる。つまりそれは言語という觀念の表象によ  
って現われるのである。しかし、凡ゆるものが觀念化されうるが故に、絵画、彫刻、音  
楽は、その儘の姿を以てしては、到底、文芸に於て現出されることが出来ないにして  
も、觀念化することによって絵画的な、音楽的な、時には彫刻的な感じをもつ表現体  
を文芸に於てもつことが出来る。而もそれ等は文芸という立場を固守することによ  
て出来るのである。例えば、絵画は二次的空間の芸術であり、之に反して文芸は時間  
的な芸術である。従って絵画は肉体及び肉体と同じ物の形体を描くに適し、文芸は  
人間及び物の行為を叙述するに適するが、文芸は暗示的な仕方によって、比喻に  
よって、静止を表わす言語を用いることによって、絵画のなしうることを絵画にも劣らず  
描くことが出来る。自然描写の場合などは慥かにそうである。又、音楽のなしうることを  
なすことも出来る。例えば英国のスウィンバーンの詩などはそれである。彼の詩は時  
には詩的内容を離れて一つの響きから次の響きをよび起し、複雑にもつれてはやがて  
整然と統一されて行くところに偉大なる交響楽を想い起させるものがある。又、彫刻  
や建築のなすことをなしうることも想像するに難くない。

のみならず、言語をもって組み立てられた文芸は、他の芸術を以てしては到底、表  
現することの出来ない多くのものを表現することが出来る。例えば人間の情緒を表わ  
すことは、他の芸術の感覚的な形態によって或る程度までなしうるにしても、人間の  
もつ情操豊かな思想、意見、随想等は文芸にのみ独得のもので、それを感覚的な他  
の芸術が表わすことは不可能であると言って差支ない。

そうして見ると、文芸は特別に自由な芸術であることが出来る。それは他の

(次ページへ続く)

芸術のなしうることを観念化することにより、言語により表わすと共に、他方、他の芸術のなし得ないものを表わすことも出来る。しかしそれだけ、それが誤って一步足を踏み外すと、芸術としての地位を失う危険性のあることも認めなければならない。

言語の芸術としての文芸は、そうした意味に於て、そのもつ特質を発揮して、凡ゆる他の芸術のなしうるものをなすことが出来る。それは言語という、他の芸術の媒介とする色彩とか、線とか、音響とか、立体的な形像とかいうものとは性質の異なった、感覚的でない、柔軟性をもつものを媒介とするお陰である。

ヘーゲルが言うように、他の芸術に於ては、作品が感覚を通じて見る人、きく人の思想に憩えるが、文芸は言語を通じて、直接読者の魂に憩える。勿論、言語は感覚を通ずることなくしては把握されない。然しその感覚的な意義は、音楽や絵画などと比較して見ると問題にならぬほど小さい。

従って文芸は、一方に於ては視覚に憩える絵画的なものを観念化し、言語を通じて表現するが故に、それは絵画、彫刻と或点に於て接触すると見ることが出来る。又、他方に於て音響の芸術の表わす感情と似たものを言語を通じて表わすことも出来るが故に、或点に於て音楽と接触していると見ることが出来る。しかし言語によって表わされる文芸は、飽くまでそれ自身に固有な表現をもたなければならないことが考えられる。言語は最も自由性を持ち、凡ゆる人間がそれを自由に使用するだけに、文芸としての立場を危殆に陥れんとする傾向が屢々見られ、その危殆は言語を使用することの不得手なところから生ずるのでなくして、それを使用することが巧みでありながらも、文芸の性質に関する認識を欠いているために生ずる場合が可なり多い。即ち絵画と文芸との性質の混同及び音楽と文芸との性質の混同から来ている場合が最も多いように思われる。

今茲に絵画と文芸との性質の混同から来る文芸の危殆について述べて見たいと思う。

絵画は二次的空間の芸術である。絵画を鑑賞する人は、画面全体を鑑賞の刹那に於て把握する。しかし文芸作品の鑑賞に於ては、それは不可能である。その理由は文芸に於てはその意味の把握が時間的に行われなければならないからである。然るに絵画を見て、その活々とした現実的描写に心を奪われる作家は、文芸の作品に於ても、それと同じものを言語の羅列によって実現しうるかのように考える。そこに絵画の性質と文芸のそれとの混同がある。

そうした混乱の生ずる主な原因は、文芸の表現機関である言語が文字という符号となって視覚に憩えるがために、眼に映ずる麗わしい事実を文字に翻訳して細かく羅

(次ページへ続く)

列することが、絵画と同じように美しく、眼に憩え得ると考えるところから来ているように思われる。しかしこれは決して正しい趣味とは考えられない。それによって読者の心像が却って混乱され、印象が不明瞭になることは、屢々、読者の経験するところである。今茲に文芸の如何に特殊なものであるかを明らかにせんが為め、二、三の例を引用して説明して見たいと思う。人麿の作に次のような短歌がある。

ひむがしのぬにかぎろひのたつ見えてかえりみすれば月かたぶきぬ

此の短歌を読む人には、如何なる印象が頭に浮ぶであろうか。恐らく読む者はこれによって、一つの牧場か草原かを彷彿として頭に浮べるであろう。一方には遥かに村か或は少なくも雑木林があり、草原の東に方って曙光が立ちかかって居り、西には月が遥かに山の端に傾いている。そして草原には馬に乗っている人間が点在する。景色は方に夜明けのそれである。

しかし、翻ってこの作品に現われたものを考えて見ると、二つの事象しか現われていないのである。一つはかぎろひであり、他は傾ぶく月である。これほど簡単な事実しか現われていないのに、この短歌を読んだ読者の心像は、決してそうした簡単なものではない。牧場、村、山、月、人間、曙光が渾然として調和され、而も雄大なる一つの情景を展開している。

若しこの短歌に現われたと同じ情趣を絵画で表わさんとして、この作品に現われたままの事象、即ちかぎろひと傾ぶく月だけを描くとしたら、それは決して絵画とはならないことは明らかである。絵画とするには、単に傾ぶく月だけを平地に描くことが出来ないのも、恐らく山か、さもなければ何物かを要するであろう。又、遥かの山と傾ぶく月と曙光とだけでもこの短歌の主旨にそう絵画を形作ることが出来ないであろう。更に草原とか遥かの木立とか村とかが必要なのではあるまいか。少なくも曙光と傾ぶく月とだけで絵画を形造ることの出来ないことだけは明らかである。

僅か 31 文字をもって、この短歌が不思議な情趣を表わし、多くの事象を包んでいるところに、文芸作品としての不思議な生命がある。そこに言語の芸術のもつ不思議な生命があり、言語の芸術と感受の芸術との相違点がある。この特質は言語のもつ音調、律調によっていることは勿論であるが、一つはこの短歌が自然の最も中心的なもの、最も印象的なものを取り上げて他を暗示し、想像に憩え、それを音調や律調によって効果的にしていると見ることが出来る。若しこの作家がこの自然を絵画的に描写せんが為め、文芸の立場を離れて、自然をうつす言葉を羅列しようと試みたら、必らずや文芸として失敗したに相違なからうと思われる。また芭蕉の有名な

## 荒海や佐渡によこたふ天の河

の句を考えて見ることにしよう。これは最も壮大な情趣に漲る句である。これほど簡潔にこれほど雄大なものを、然も現実的に描いている句はない。これと同じ趣きを絵画によって直訳的に表わそうとすることは不可能ではなからうかと思われる。此句に現われた事象は、荒海、佐渡、天の河の三つに過ぎない。若し絵画によって此句に現われているような趣致を表わすとしたら、これ等三つの事象を以てしては、到底不可能であるばかりでなく、寧ろ滑稽なものになり終るのでないかと思われる。絵画に於て此句に現われたような趣致を表わさんが為めには、此句に現われた事象をその儘に絵画的に翻訳するような方法を止めて、全く絵画独得の手法によらなければならないであろう。

文芸に於て斯うした描写の無造作に出来る所以は、文芸に於ては人麿の例に於けるように「月傾きぬ」と言えば、平地に傾くにしても、山の端に傾くにしても、何れの場合をも包容することが出来るのであるが、絵画に於ては、具体的にそれを表わさなければならないところにその困難な点がある。又、芭蕉の例に於ては佐渡島のような大きな島を観念の上に於ては想像するに難くないが、絵画となれば、それを具体的に感覚的に示さなければならない。従ってこの句の精神を絵画に直訳して佐渡島を画面に描き、その上に天の河を描くとすれば、壮大なる絵画を形成するというよりも、寧ろ滑稽なる感じを与えることになる。そこに観念を表わす言語の芸術である文芸と、感覚に直接的に慇える絵画との相違点がある。

古今集の歌に

わたつみのかざしにさせる白妙の浪もてゆへるあはぢ島山

というのがあつた。歌の意味は海のかざしである波によって淡路島が洗われているというのである。斯う歌われて見ると、淡路島という大きな島が海の中にあつて、白い波を簪のようにもっている光景が、いさか繊巧ではあるがよく現われて、不自然には感ぜられない。しかしこの歌の意味をその儘、直訳して絵にかいたら、滑稽な不自然なものとなり終るだらうと思われる。これも文芸は観念に於て淡路島のような大きなものを自由に取り入れることが出来るからで、絵画に於ては目に見える姿として、具体的に描かれなければならないところに困難がある。その点に於て芭蕉の句の例と同じである。

(次ページへ続く)

斯うした問題にぶつかって、過去の名匠と言われる人達の手法が、如何に文芸  
独得のものであったかを見るのが参考になると思う。英詩人ワーズワースのルーシと  
いう乙女を歌った詩に次の様な一節がある。

A maid whom there were none to praise,  
And very few to love

A violet by a mossy stone  
Half-hidden from the eye!  
—Fair as a star, when only one  
Is shining in the sky.

彼女はたたえる人もなく  
愛する人も少なき乙女なりき。

苔むせる岩のほとりの  
人目より半ば隠れし堇の如く、  
ただ一つ空に輝やく  
星の麗しきにも似たりけり。



此詩を読んだ読者は、田舎びた可憐な乙女の姿を彷彿として目のあたりに思い浮  
べることであろう。しかし、この詩に現われたものは、美しい比喻だけで、それ以上、何  
等、この乙女の姿が写實的に述べられていない。しかも斯うした簡単な叙述が、却っ  
てこの乙女を活々とさせているのである。また英国の詩人キーツの「聖アグネスの逮  
夜」(The Eve of St. Agnes)という長篇の詩がある。キーツほど濃艶な美を展開し、且つ  
展開するに適當な詩人はなかった。此詩は彼のこした詩の代表的なものである。そ  
して此詩に於て特に美しいと思われる主人公のマデラインという女性の姿は、夢のよ  
うに中世的な雰囲気の中に恍惚とさせる姿を以て浮ぶ。読者はこの主人公の麗わし  
い眩ゆい容姿と、その一挙一動とが、酔わせるような芳香を以て身に迫るを感じ、  
彼女に関する如何なる描写が、斯うした印象を与えるのであろうかを考える。しかし読  
み返して見て、この詩の如何なる部分にも、彼女の容姿に就いての何等直接的な  
描写のないのを見て驚くであろう。どうして此詩が斯うした絵画的な描写を有することな  
くして、絵画的な印象を与えるのであろうか。よく読んで見ると、それはこの美しい乙女

(次ページへ続く)

の適切なる比喻と、雰囲気の良い描写と、彼女の動作の巧妙なる叙述とによって、主人公の麗わしさを暗示し想像させているのよることが分る。つまり文芸として取るべき方法を、この詩が最もよく守っていることに起因するのである。独逸のレッシングの言った、絵画の取扱うべきものは形態であり、詩の取扱うべきものは行動であるという法則が、最もよく守られているのである。

この問題に関して故高山林次郎が「詩歌の所縁と其の対象」に於て述べている意見には、耳を傾ける価値があるように思われる。氏は詩と絵画との性質の相違点をのべ、多くの文芸作家がそれに就いての誤解をもつため、作品に於て多くの不用の言語を用いていると言って色々の例を引用している。氏はホーマーの「イリアッド」の第三巻にあるヘレンの叙述の文芸としての法則に叶えることを認め、シェークスピアの「ロミオとジュリエット」(Romeo and Juliet)第一幕五場のジュリエットや、「十二夜」(Twelfth Night)の第一幕五場のオリヴィアの叙述を推奨し、ゲーテに於ては、「ヴェルテルの悲しみ」(Werthers Leiden)の内のロッテの叙述の優れていることを認めている。しかしミルトンの「失樂園」(Paradise Lost)のアダムとイヴとの容貌の叙述の索然たることを述べ、英国のスコットの「湖上の美人」(The Lady of the Lake)の形容も、テニソンの「プリンセス」(The Princess)の容貌の叙述も、「園守の娘」(The Gardener's Daughter)の形容も、この点に於て失敗であると断じ、バイロン、バーンズ、シェリ等の作品は、文芸としての叙述に叶い、特にシェリの「アラスター」(Alastor)の中の幻影中の美人は、最も文芸としての叙述に叶えるものであるとしている。

氏は「源氏物語」に現われた源氏や多くの女性達に就いての描写の優れていることを述べ、源氏の美貌を叙述した言葉として、

「いみじき武士、あだかたきなりとも、見て打笑まれぬべきさまのし給へれば、えさし放ち給はず。」「桐壺」

を引用し、夕顔の姿を描いた次の節を引用している。

「しろき裕薄色のなよやかなるを重ねて、はなやかならぬすがたいとらうたげに、あえかなる心地して、そこととりたててすぐれたる事もなけれども、ほそやかにたはたほとして、物うち言ひたるけはひ、あな心ぐるしと、ただいとらうたく見ゆ。」「夕顔」

氏は更に進んで「平家物語」や「太平記」の美人の叙述の優れたる点を述べ、近

松の美人のそれの法に叶える所以を検討し、馬琴のそれの散漫模糊たる点に触れ、明治時代に至って、紅葉や眉山の人間描写の散漫なる点に言及し、次のような例を挙げている。

「紳士は年齢二十六七なるべく、長高く、好き程に肥えて、色は玉のやうなるに、頬の辺には薄紅を帯びて、額厚く、口大きく、腮あごは左右に蔓(?)こりて、面積の広き顔は稍正方形を成せり。緩く波打てる髪を左の小鬢より一文字に撫付けて、少しは油を塗りたり。濃からぬ口髭を生して、小さからぬ鼻に金縁の目鏡を挟み、五紋の黒塩瀬の羽織に華紋織の小袖を裾長に着做したるが、六寸の七絲帯に金鏈くさり子を垂れつつ、大様に面を挙げて座中みまはを眊したる容は、げに光を発つらんやうに、四辺を払ひて見えぬ。」「金色夜叉」第一章

氏の挙げた多くの例は、必ずしも氏の論旨と一致しないものがあり、又、散文の場合には必ずしも韻文の場合とは同一に見らるべきではないと考えられるが、論旨は大体に於て肯ずけると思う。

山部赤人の富士山を歌った長歌などもそうした意味に於て一新境を開いたものである。

渡る日の影も隠ろひ  
照る月の光も見えず  
白雲もい行きはばかり  
ときじぞ雪は降りける



これは壮麗なる山の姿の表現である。普通の詩人ならば、富士山の姿をもっと絵画的に表現したいと思うところであろう。即ちその色彩とか形態とかいう方面を精確に示したいと思うであろう。しかしこの作者はこの山の壮麗なる姿やそれのもつ偉大なる力を、大自然との関係を示すことによって間接的に表示して成功している。これが文芸の法則に叶っているのである。

「更科日記」の作者は富士山の姿を比喻の力を借りて表わしている。

「さまことなる山の姿の、紺青をぬりたるやうなるに、雪の消ゆる世もなく積りたれば、色こききぬあこめに白き裯着たらむやうに見えて、山のいただきのすこし平ぎたるより、煙は立ちのぼる。夕暮は火の燃えたつも見ゆ。

要するに絵画的描写と文芸的叙述とは根本的に異なるものであり、文芸に於て絵画的描写を翻訳的に試みることは、多く失敗であり、それをやるにしても、最も中心的なものを取上げ、他を暗示する仕方を取らなければならない。詩に於ては特にそうである。英国の詩人ロゼッティは詩人としても画家としても優れた作家であり、「恵まれし乙女」(The Blessed Damozel)という題名の下に作詩し且つそれを絵にも描いている。詩に現われたこの乙女の容姿に関しては、「彼女の眼は、夕べに静まれる海の深さよりも深かりき」というに過ぎず、髪については、「彼女の背に垂れし髪は、熟せる小麦の如く黄金色したり」と言っているに過ぎない。而も此詩を一たび読めば、彼女の雰囲気きふきの描写により、彼女の行動の叙述により、彼女の抱く情緒の表現により、彼女はたとえなき麗わしい乙女という印象を与えている。この詩人は画家でもある為め、彼の詩には抽象的な問題も絵画的な具体的なものとなって現われている。例えば彼の「生命の家」(The House of Life)という百あまりのソネットなどそれであるが、何れも詩のあるべき程度に於て絵画的である点に於て著しい。

或人は絵画はそういう風に感覺的な姿を微細に取扱うもの計りではなく東洋独得の水墨の如く、又欧州の象徴的な絵画の如く、文芸作品と同じように暗示的であり象徴的である作品もある。従ってそれは文芸と余り異なるものではないと主張するかも知れない。勿論、そうした作品のあることは事実である。しかし絵画の精神と文芸のそれとは元来異なっている。そして絵画の象徴は文芸に於けるそれとは多くの場合異なっている。文芸に於ては事物を省略してそれを暗示させることの出来ることは、前の例の如くである。しかし絵画に於ては、描かれるものそれ自体を簡素化することが出来ても、事物を省略することは減多に出来ない。たとえ末梢的なものを省略することが出来ても、人麿の短歌の例の如き場合に於て、傾ぶく月とかぎろひだけでは決して絵画を構成することが出来ない。絵画的美と文芸のそれは斯くも異なるものである。しかし絵画的美に心を奪われる人は、文芸と絵画との性質を混同して、ややもすれば空間に現われた美しいものを細大洩さず述べたてることに、文芸の絵画的美が存すると思える傾向がある。

勿論、上に述べた例は多く詩に属し、それ等は韻律の制約により極度に限られた言語の範囲に於て、出来るだけの効果を収めようとしたもので、散文に於ては必ずしもそうであるとは考えられない。しかし散文に於ても、文芸の特質を考え、中心的なものを捉えて他を暗示する方法を取った方が、却って印象的な表現美をもたらすのではないかと思われる。日本に於て芭蕉の散文などには、そうした傾向が見られ、欧

州に於てはフランスのフローベルの作品や英国のペーターの叙述にはそうしたものが多くに思われる。叙述を多くして、それが文芸に於ての絵画的美をもたらすと考える作家は、却って才気の優れた人に多く、斯くて語句を巧みに弄ぶことに感嘆する人は、何れも絵画と文芸との差別に関して認識不足の人が多くようである。

次に文芸と音楽との相違について述べて見たいと思う。

音楽の特質として目立つことは、その内容と形式とを離して考えることの出来ないことである。即ち音楽の内容がそれ自身形式となって居り、形式が又内容となって居ることである。文芸に於て何が音楽に最も近いかと言えば、抒情詩がそれであると言うことが出来る。その故は、抒情詩に於ては、その形式である律調、韻の力が詩の内容であるものと一致して、ただ単に作者の詩想を伝える以上に、音楽の世界に侵入する。即ちこの場合に於て詩は読むべきものというよりも歌われるにふさわしいものとなり、内容と形式とを離して考えることが六々敷くなる。そうした場合、詩の律調及び声調が詩の内容としっかり融合すればするほどそうした感じを与える。

しかし如何に抒情詩が音楽に近づくにしても、そこには両者の間に厳然とした区別の存することを忘れてはならない。それは言語の芸術である文芸の特質と、音響の芸術である音楽のそれとの相違点から来ている。音楽は音響其自体の性質や抑揚や長短から来る芸術であるが、抒情詩に於ては観念の象徴である言語が、響きの暗示や律調によって音楽的な響きを与えるにしても、それ等は観念それ自体が主となって統率さるべきものであり、観念を離れて独立性をもつのではない。之に反して音楽に於ては、音響はそれ自身の独立性をもち、それ自身の意味をもって動く。

こうした両つのものの混同から来る弊害は、文芸に於て、時々、見られる。その多くは詩に於てである。詩が音楽的であることは、文芸が絵画的であることと同じく、或る程度までは決して排斥すべきではない。しかし観念である詩想を無視して、ただ響きや諧調によって読者を引ずって行くに至っては随かに弊害である。前に私はスウィンバーンの詩の音楽的であることを述べた。しかし彼の詩の弊害のあるところもそれである。彼の詩は時には美しき響きによって引ずられ、詩想と何等関係なく響きが響きをよび起し、それが涯てしなく続くことがある。それは花やかである。読者に一種の快感を与える。しかし翻って考えると、詩想的には何等の満足を与えず、却って空虚な感じを与えることが多い。彼の傑作「カリドンのアタランタ」(Atalanta in Calydon)の如きものにも、そうした余りにも雄弁な感じを与えるところがある。

要するに、音楽と文芸とは別々の使命をもっている。音楽は音響の芸術であり、飽くまで感覚に慇懃するものであるが、詩は情操的観念が自からを表わす象徴として言語

(次ページへ続く)

の形式を取り、言語の性質として響きを持ち、この響きが音楽的な感じを与えるに過ぎない。

私は茲に特に文芸と絵画及び音楽との相違点を考えて見た。その故は、文芸はこれ等の芸術と最も縁の近いものであり、絵画に憧憬をもつ人はとかく絵画と文芸との性質を混同して絵画的心像をよび起す言葉を羅列しようとし、音楽に魅力を感じる人は、響きに引ずられ、詩想から離れて、響きから響きへと走って行く傾向があるからである。彫刻や建築の如き芸術に至っては、これ等に比べて文芸とは遙かに縁遠いものであり、それに迷わされて、文芸の使命を怠る例は極めて少ない。

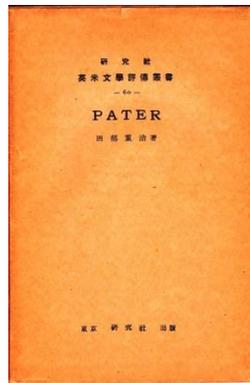
文中の表記は、文藝→文芸、その他旧字旧仮名遣いを、読みやすさも考慮して適宜書き改めてあります。



『中世欧州文学史』  
昭和7年12月18日発行  
第一書房



『英国の自然詩人』  
(岩波講座・世界文学)  
昭和7年12月30日発行



『ペーター』  
(英米文学評伝叢書)  
昭和11年1月25日発行  
研究社



『ペーターの作品と思想』  
昭和40年9月1日発行  
北星堂書店

## 疎開とウェブスター

石 黒 良 二

いよいよ戦況が日本に不利になるにつれ、東京在住の田部にとって疎開が必要となり、結局、信州の追分に行くより外へ行くところはあるまいと思った。一番始末に困ったのは書物であったが、簡単に入手できそうなものは売り、そうでないものは何とか分散して預けたり、押し入れに入れたりした。それまでに最も多く読み、興味を失わないものにウォルター・ペーター (Walter Pater) の作品であると思って、ペーター全集とベンソン (Benson) とライト (Wright) との彼の評伝、それにウェブスター辞典をぜひ必要なものとして、疎開地へ携えることにし、用意をととのえたのは昭和 20 年 5 月の半ば頃であった。

昭和 21 年 4 月、信州の小諸に「高原学舎」<sup>(注1)</sup>という戦場から帰還する青年たちを一年間教える学校が山室静により設立され、田部は無理やり校長に押されてその職についた。

高原学舎と関係をもつものに「高原」<sup>(注2)</sup>という季刊雑誌が鳳文書林から発行され、それにペーター研究をのせるようにとすすめられた。そこで彼の作品を年代順に読んで、彼の思想の推移を細かく観察すると共に、彼の評伝をもあらためて読み直した。ペーターの作品は決して多いというほどではない。しかしそれを初めから終わりまで読んで、彼の思想の推移をはっきり捉えることは容易なことではないと田部は述べている。わずかに彼の伝記と最初の作「ルネッサンス」のほんの一部をやっと捉えて疎開地から引上げるようになった。

さて筆者の関心は、持参したペーター全集もさることながら、ウェブスターの辞書にある。

英国において辞書で思い出される人物といえば、18 世紀の文豪サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) である。これに対して、米国でこのジョンソン以上に辞書の代名詞となっているのがノア・ウェブスター (Noah Webster) で一生を通じて愛国者であった。ウェブスターは辞書編集において野心的で、実際はジョンソンの辞書にひじょうに依存するところが多かったが、自分の辞書に独自のものを加えて、その個性を強く主張した。その後現在まで続く辞書制作の中で Webster という名は、19 世紀の半ば以来、彼自身が編集し、刊行した辞書や、その系統の辞書だけでなく、広く一般に辞書を意味するほどになっている。わが国の国語辞典で編者の名前が辞書の代名詞として用いられることはまずない。わずかに「新村」、「金田一」などが専門家に知られているくらいである。

ウェブスターが初めて編んだ辞書は『簡略英語辞典』 *A Compendious Dictionary of the English Language* (1806) で、約 38,000 語を収録している。その後およそ 20 年間の準備期間を掛けて 1828 年の 70 歳のときに刊行した『アメリカ英語辞典』 *An American Dictionary of the English Language* は 7 万語を収録する 2 巻本で、1841 年の改訂増補版はウェブスター自身による最後の仕事となった。ジョン万次郎が福沢諭吉とともにサンフランシスコで一冊ずつ購入したウェブスターの辞書はおそらくこの『アメリカ英語辞典』であると思われる。

疎開地の追分で使用したのものとして次の 3 点が候補に挙げられる。

(次ページへ続く)

- (1)『ウェブスター・ニュー・カレッジ英英辞典』 *Webster's New Collegiate Dictionary*(略称WNCD)第9版は1983年に刊行し、見出し語句は約16万。初版が1898年に出て以来一世紀に及ぶ。他の机上版にはない古い歴史を持ち、高い信頼を得ている。
- (2)『ウェブスター国際英語辞典』 *Webster's New International Dictionary* 見出し語句は40万で1909年に刊行。
- (3)『ウェブスター(新国際英語辞典)第二版』 *Webster's New International Dictionary, Second Edition*(略称Web2nd) (2)の改訂版で見出し語句66万という膨大な項目を収めている3,300ページ余りの堂々たる大冊。1934年に刊行。ちなみに『ウェブスター第三版』 *Webster's Third New International Dictionary of the English Language*(略称Web3rd)は見出し語句は45万で1961年に刊行。今やアメリカ辞典界の最高峰に位置している。

田部は英国人ペーターの「ルネッサンス」(*The Renaissance*)を翻訳する際に『センチュリー・ディクショナリー』 *The Century Dictionary* を使用している。この百科事典的英語辞書も米国で出版されている。その他に英国の『ブリタニカ百科事典』 *The Encyclopaedia Britannica* 等も参考にしてはいる。しかし英語のことばの辞書として世界で最も権威のある『オックスフォード英語大辞典』 *The Oxford English Dictionary* に触れていないのは不思議である。

OEDの第2版は、収録約50万語で全20巻となり1989年に刊行。初版から約一世紀の歳月をかけている。OEDには簡約版の『コンサイス・オックスフォード・ディクショナリー』 *The Concise Oxford Dictionary of Current English*(略称COD)がある。1911年に刊行されて以来、英本国ばかりでなく、他でも広く中型辞典の手本として認められ、我が国においても、その影響力は大きかった。

田部は大正四年に「ルネッサンス」を翻訳した時、ペーターの用いている culture の訳語として「教養」という言葉を作った。現在、どの英和辞典も教養という訳語をのせている。ペーターの用いた culture は今までに英国人の使っている culture とは意味を異にし、単に狭い倫理的なものでなく、もっと広い文化的なものを含み、それがやがて人間性をこしらえるに至るものであることを発見した。従って修養と訳するのが不適當であると考え、永い間考え抜き作った訳語は「教養」だったと述べている。

速さ、効率、均質化が求められる現代社会において、「教養」という言葉はもはや死語なのであろうか。いや、今こそ豊かさ、繊細さ、多様性のある世界を守りたい。人間の価値としての「教養」の復興が必要である。

(注1)正式名は浅間国民高等学校で、佐久地方を地盤とするデンマーク流の農業高校を目指した。山室静夫妻、片山敏彦、矢内原伊作、橋本福夫らが講師となる。生

徒数は八、九十名であった。昭和 22 年 3 月閉校。

(注 2)堀辰雄、田部重治、片山敏彦、山室静か編集同人となり、昭和 21 年 8 月に創刊し、昭和 24 年 5 月に 10 号にて廃刊。田部は「ペーターの思想と批評」を8回にわたって連載した。

#### 参考文献

『英語青年』、研究社、1961 年 5 月号。

『英語青年』、研究社、1968 年 5 月号。

『橋本福夫著作集 I』、早川書房、1989 年。

『世界の辞書』、研究社、1992 年。

ペーター『文芸復興』、田部重治訳、岩波文庫、1937 年。

『詩と断章』、田部重治、七丈書院、1942 年。



田部重治研究誌「鶴のやうに」第 4 号(2004 年 12 月 4 日発行)所収

### 田部重治特集に寄せて

白坂正治

再びの田部重治特集を私はわくわくして待ち望んでいた。研究会を主宰しているとはいえ、そこでの活動の積み重ねによる“既知”はあくまで物理的な“既知”で、心奥は常に“未知”の高鳴りを覚えているから。「田部の山旅は哲学とともにある。繊細な知性の上にある思索の旅である。」とする阿部氏の田部観は至言である。哲学的色彩を帯びた作品群は、田部自身が語っているように「やむにやまれぬ」心情を紡ぎに紡いだ真情が横溢している。混沌より徐々に見えて焦点が定まって統一へと向いつつも、田部の場合、まとまりは思想の凝結ではなく、どこまでも永遠に心の魂の行方を追い続けることなのである。それは遠い道のり、涯てしなき道程である。森羅万象に感泣し、萌え出づる心のままに現し世の旅、人生の旅を続け、行路で数知れぬさりげなきの種を大地に播いたといえよう。13 ページの資料の後人の田部語りは百花繚乱。しかしそこから厚みのある百家争鳴にならなかったのは残念至極。そういう日がいつか来るだろうか。

山茶花の葉陰ともし頃。

## 田部重治著作の件名分類の試み

手元に確認できる田部重治の著作(編著を含む)を次のように分類してみた。

- 哲学・人生論
- 文学論・英文学論
- 歌集・詩集・散文詩
- 紀行・随筆(山岳・山旅)
- 随筆(山岳・山旅を除く)
- 翻訳(英文学)
- アンソロジー(田部重治によって編集された、諸作家の作品集)
- 文庫(文庫になっているものを知ることは、名著を知るために有効。現在では出版経費の節約、あるいは売上部数をかせぐため、最初から文庫で出版される本も多いが、もともと文庫とは名著を多くの人に読んでもらうために、との計らいから始まったものである。)

随筆集は山岳関係、山岳紀行を集めたものが多いが、それ以外の作品を集めたものもあり、また山岳関係の随筆集の中に山岳とは関係ない内容の作品が収められていることも多く、それがまた楽しみの一つである。哲学・人生論も所々に見られる。随筆集の正確な件名分類は不可能であり、双方の件名に重複して含める、ということになる。

(阿部良司)



田部重治  
1964年、80歳頃の肖像

『人生の旅』  
昭和11年1月10日  
第一書房発行



## 五十嶋一晃著『田部重治の登山と英文学』発刊の意味

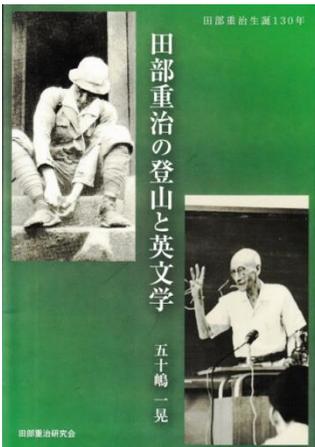
多分野に高く評価されるべき研究書および文芸作品を残しながら、田部重治全集はいまだに発行されず、田部重治評伝も存在しなかった。

そのような中、没後30年にして、ついに「田部重治研究会」が設立されたことは、本当に喜ばしいことであり、またその研究成果として会報「鶴のやうに」が創刊されたことは、山書愛好家の中でも極少数派となりつつある田部重治愛読者にとって、非常に励まされる思いであった。さらに一昨年、生誕130年にしてついに、田部重治評伝に当たる『田部重治の登山と英文学』が田部重治研究会が中心となって上梓されたことは、生きていた甲斐があった、というものである。これはすなわち、田部重治作品の知られざる森を彷徨していた時に、偶然地形図を手に入れたような思いである。

登山家の中で多くの山岳関係の著作を残している人に、小島烏水、冠松治郎、深田久弥、今西錦司等があげられ、僕の知る限り、深田と今西についてはすでに評伝らしい本が存在するし、たしか小島についても最近、「平凡社ライブラリー」で出たはずである。しかし最も研究に値する登山家、またその人間を知るに必要な著作を最も多く残しているのは田部重治をおいて他にないのである。

『田部重治評伝』が出るまでには、それなりの時間が必要であった、ともいえるが、白坂氏と石黒氏、二人の出会いがなければ、田部重治研究会の設立自体がなかった、ともいえるであろう。

田部重治特集第二弾、本編では文学論・英文学論を取り上げてみた。「鶴のやうに」第4号に、白坂氏と共に「田部重治研究会」を設立した石黒良二氏の論文「疎開とウェブスター」があるので、ここに引用させていただきます。



文「疎開とウェブスター」があるので、ここに引用させていただきます。また前号および本号の田部重治肖像は「鶴のやうに」第3号より転載させていただきました。

田部重治研究会の出版物に関するお問い合わせは、  
田部重治研究会・白坂正治氏まで。  
住所：武蔵野市境南町1-10-5（〒180-0023）  
電話：0422-31-7525

## 奥多摩・鷹ノ巣山ハイキング

5月3日（火） 天気・くもり

早朝4時前の出発で、鹿沼発の一番電車よりもっと早いJR宇都宮線の一番電車に小金井から乗って（休日お出かけパスの都合）、東京の奥山へ日帰り登山に行ってきました。帰宅は夜10時過ぎとなり、なかなかの強行軍でしたが、それ以上に山道が厳しく、膝の痛みに、帰りの電車の乗り降りにも苦労する人も。

奥多摩・鷹ノ巣山には、日原鍾乳洞に向かう道の途中の登山口から取りつきます。溪流の傍らを稲村岩という巨大な岩をまいて登り始め、植林地から広葉樹林帯へ、枯れ葉が積み重なった急斜面をひたすら登っていきます。

やっと昼過ぎに山頂着、うすぼんやりですが富士山もすぐそこに見えました。山頂のご褒美に気を良くしつつ、遅めの昼食。

登ってきた道を引き返す下り道、よくもこんなに登ってきたものだと思いながら、膝には一層厳しい行程後半となりました。最終便のバスを待つ間に東日原の集落で1軒だけ営業中のラーメン屋（本来はうどん屋？）で早めの夕食。後は座って眠って帰りました。



鷹ノ巣山山頂にて  
背後には富士山もうすぼんやり

### ※ 参加者

小川知峻・結月・真司、佐々木伸二、野田 亨、石崎理絵・村井浩平、  
石崎隆史・裕子、阿部真大・良司・みゆき（計12名）

### ※ 見た植物

（針葉樹）カヤ、スギ、ツガ、モミ、（常緑樹）イヌツゲ、  
（落葉樹）アオハダ、アカシデ、イヌブナ、ウラジロノキ、  
ウリハダカエデ、コナラ、サワグルミ、チドリノキ、トチノキ、  
ハウチワカエデ、フサザクラ、ブナ、ホオノキ、ミズナラ、ミズメ、  
（木の花）アセビ、オオカメノキ、ヒメウツギ、ミツバツツジ、ヤマザクラ（写真↑）、  
（草の花）クワガタソウ、セリバヒエンソウ、タチツボスミレ、



ナガバノスミレサイシン（葉のみ）、ハシリドコロ（終花）、フモトスミレ（葉のみ）、  
ミヤマキケマン、ミヤマハコベ、ムラサキケマン、ヤハズソウ（葉のみ）、  
ラショウモンカズラ（写真→）

✿ 見た・聞こえた鳥

イカル、ウグイス、オオルリ、キビタキ、ジュウイチ、  
センダイムシクイ、ツツドリ、ヒガラ、ミソサザイ、ヤマガラ、  
ルリビタキ



✿ 参加者からいただいたおたより

本日は登山にお誘いいただきありがとうございました。普段の学生生活では体験できない、有意義な時間でした。

今回は、標高約 1700m の鷹ノ巣山の山頂を目指すということで、昨年同時期の登山のこともあり、踏破できるか少々不安でした。なので、山頂に着いた時には、達成感よりも安堵のようなものを覚えました。

登山道の前半は川沿いの緩やかな道のりでした。個人的にこの構図は好きで、「山河」という言葉が日本の自然を表すのに使われることにも納得がいきます。生き茂る新緑が視覚に訴えてくるのは言うまでもなく、川のせせらぎが聴覚に優しく囁いてきて、「山河」を感じるには十分でした。

登山道の中盤から後半は、かなりの急勾配の場所が多く、あまり心にゆとりの持てない登山でした。下山の時にも、危うく滑りそうになり、木の幹や枝に掴まる場面が何度かありました。ふと思うと、木々は目印になったり、支えになったりと登山においても大事な役割を果たしていると考えさせられました。

この度は、自然に触れる時間を設けていただきありがとうございました。次の機会があれば、またよろしく願います。



根こそぎ倒れた大木の  
根っこの“壁”の前で

(野田 亨)

富士山  
↓



山頂のごほうび、鷹ノ巣山山頂からのパノラマ  
右端彼方には富士山の姿も（肉眼ではもっと大きく見え、「さすが東京」と思ったのでした）

## 鷹ノ巣山紀行文

日光市立東中学校 佐々木伸二

あーねむい。阿部家に前夜から泊まり込みで起床はAM2時30分。こんなに早い  
の初めてだ。宇都宮線始発に乗るため(近くの)セブン・イレブンに集合したのはAM3  
時30分。阿部家、小川家各3名と石崎家2名、そして僕。鹿沼を9人で出て車で夜  
の道を小金井駅へ向けて出発した。

今回行くのは東京都奥多摩町の鷹ノ巣山。去年泣く泣  
く帰った六ツ石山の雪辱を晴らすべく今年も突撃しました。

小金井駅は始発前はまだまだ暗。シャッターも閉まってい  
ました。開くの待ってホームへ。宇都宮発の列車はけっこ  
う混んでいてクロスシートは取れず。バラバラになって赤羽へ。  
その後埼京線で新宿へ。ホリデー快速おきたま1号で次は奥



JR奥多摩駅前の  
バス待ちの賑わい

多摩へ向かいました。三鷹で3人が合流し総計12人で奥多摩へ。青梅線には鳩ノ  
巣という駅があるがこれから登る山と関係があるのかな?と思いつつ奥多摩着。バス  
の混み方のひどいこと! (増発)3台目のバスで東日原に向かいました。

ここから歩いて登山口へ。いよいよ本格的に登山開始。谷へおりて川を渡りいよ  
いよ登り始め。しばらく行ってこれから行く稲村岩を見上げると「うーん」となるほどの  
石灰岩のがけ。裏から回り込んで岩の上へ出たあと尾根ぞいに鷹ノ巣山へ。まあ楽  
だろーと思っていたらこの先はまさに「地獄」でした。行けども行けどもえんえんと登り  
坂。5分も歩くと音が上がるほどの急坂が2、3キロにわたって続きみなあつというまに  
へろへろに。いよいよ最後か!?と思うとさらに20分も続きようやく鷹ノ  
巣山へ(後で知ったのですが、こういう尾根を「バカ尾根」という  
そうです)。リュックを投げ捨て地面に倒れ込むと心臓の鼓動が  
はっきり分かってよほど大変だったんだ…と思いました。実のところ  
別のおばさんが一人途中でリタイアしていました。到着したのは  
PM2時頃で遅めのお昼を食べました。上空では訓練のためか米  
軍横田基地のヘリが旋回していました。3時前に出発。同じ経路  
をもどりました。そしたら速い、速い! 行きの5倍もの速さで下りあつ  
というまに稲村岩へ到着。そのまま下り東日原バス停へ。しかし、  
バスは10分前に行っただけで次は1時間半後。どうしよう…。  
結局近くのそばやラーメンの店で夕ごはんにしました。山菜うどん  
にしましたがこれに入っていたなめこのうまかったこと! きのこってこ



↑鷹ノ巣山頂にて  
かすかに富士山が…  
↓飛び回るヘリ



(次ページへ続く)



※ 鷹ノ巣山写真帖



東日原バス停



東日原集落から登山道への入口



鷹ノ巣山方面の眺め、右は稲村岩



広葉樹の新緑の下をひたすら登る、登る



下りも大変でした



ヒメウツギ



ハシリドコロ



フタバアオイ



ネコノメソウの仲間



メグスリノキ



クワガタソウ



ブナの発芽が方々に



オオカメノキ



ダンコウバイ



セリバヒエンソウ (外来種)



ウリハダカエデ (幹)

新緑の夕日岳ハイキング  
～鹿沼の最高地点（1526m）をめざして～

5月15日（日） 天気・はれ

鹿沼で一番高い山に登ってきました。今回は古峯神社の奥の地藏岳登山口から登りました。長い林道を経てやっと登山道に。所々の砂防堰や路肩の崩落や溪流を注意深く越え、延々と続く薄暗い植樹帯を抜けると、新緑が目に見鮮やかな原生林の道です。傍らを通れる大芦川源流沿いの湿地にクリンソウの葉の群生がありました。間もなく花の季節を迎えるのでしょう。川を離れて尾根道に上がると、ミツバツツジのピンク色がきれい。細尾峠からの道と合流すると俄かに登山者が増え、幾つものグループとすれ違いながら、地藏岳を越えてさらにひと登り、やっと着いた夕日岳山頂からは、男体山がすぐそこに見えます。賑わう大勢の登山客に混じって昼食タイム。帰りは同じ道を引き返しました。

山を下りると、古峯神社に寄って登山の無事を感謝。境内に入るのは初めてですが、神域の雰囲気疲れを忘れるようでした。



好天の夕日岳山頂にて

参加者

佐々木伸二、亀山義宗・千尋、阿部良司・みゆき（計5名）

見た植物

（針葉樹）アカマツ、カラマツ、

（落葉樹）アオダモ、アカシデ、アズキナシ、ウリハダカエデ、  
オオカメノキ、カジカエデ、コシアブラ、サラサドウダン、  
シナノキ、シロヤシオ（ゴヨウツツジ）、ダケカンバ、チドリノキ、  
トウゴクヒメシャラ（→）、トウゴクミツバツツジ、ニガイチゴ、

ハリギリ、フサザクラ、フジ、ベニバナノツクバネウツギ、ホオノキ、マンサク、ミズナラ、  
ヤシャブシ、ヤマツツジ、リョウブ

（草の花）ウスバサイシン、オクモミジハグマ（葉のみ）、オトコヨウゾメ、カキドオシ、



クリンソウ (葉のみ)、タチツボスミレ、ツボスミレ、トキワハゼ、ナンタイブシ (葉のみ)、  
 ニリンソウ、バイケイソウ (葉のみ)、ヒゲネワチガイソウ、フクオウソウ (葉のみ)、  
 フモトスミレ、マイズルソウ (葉のみ)、マルバコンロンソウ、ミツバツチグリ、  
 ムラサキサギゴケ、モミジイチゴ、ユモトマムシグサ、ルイヨウボタン、

✿ 見た・聞こえた鳥

オオルリ、キビタキ、コガラ、シジュウカラ、ジュウイチ、ツツドリ、トビ、ヒガラ、  
 ミソサザイ、ヤマガラ、ルリビタキ

✿ 夕日岳写真帖



↑ツツジに彩られた山道  
 地藏岳の名の由来? →



↑ユモトマムシグサ  
 ↓ルイヨウボタン



↑ヒゲネワチガイソウ  
 ↓ヒロハコンロンソウ



↑ミヤマエンレイソウ



↑アオダモの花盛り



←ミツバツチグリ



↑アオダモの花盛り



←地蔵岳から見た夕日岳  
 ↓地蔵岳山頂



←登山道入口付近にあったアカマツの巨木



↑古峯神社拝殿



↑立派な彫刻に飾られていた

## ※ 参加者からいただいたおたより

### 夕日岳山行

日光市立東中学校2年 佐々木伸二

5月15日の夕日岳登山は僕をふくめて5人の少人数です。夕日岳は標高1526.1mで鹿沼市最高峰です。数年前にも一度登りましたがこのときは反対の日光市、細尾峠から薬師岳経由で登りました(僕が家族なしで登ったのはこのときがはじめてでした)。今回は鹿沼市古峰原の古峯神社から登りました。

古峰原林道の入口に車を止めて登りました。林道がいったいどこで終わったのかわからなかったのですが気づくとこわれた砂防ダムにきていました。沢の水源付近にはグリーンソウがありました。またここには毒のある草が大量にありました。いったい何キロ毒が…ま、いっか。登り坂の人工林をぬけ尾根の上のハガタテ平へ。そこから広葉樹のおこうに男体山が見えました。

広葉樹の明るい尾根の上をエゾハルゼミの声を聞き、ツツジのアーチをくぐりつつ行きました。そのあと地図にあった急坂を登り1463mの地蔵岳へとう着。暑くなってきました。あとはなだらかな尾根を三ツ目、少しアップダウンをへて目的地の夕日岳へ。正面には男体山が大きく見え、その手前には半月山、奥には女峰山も見えました。

昼食をとってわれわれとしては早く12時半頃に出発。同じ道をもどりましたがあんがい行きに気付かなかった発見もありました。登山口近くには巨大アカマツがあったりもしました。

そのあとは古峯神社へ。そこへやってきたのは市長選の最中の現市長。広報のついでに勝利がんにきたようです。僕たちも参拝していきました。僕は絵はがきを買いました。そのあと入口にもどってアイスを食べて帰りました。



崩落した岩場を注意深く渡る



ツツジの下で



↑ヒオドシチョウ



エゾハルゼミのぬけがら

## ニワトコの思い出

今回書こうとしていることは、鹿沼にいたときのことであり、阿部隊長にニワトコを月報に載せることがあれば、いっしょに書きたい、というと、今のところ書く予定はないそうで、事情を話すと書いてということなので筆をとった次第です。

鹿沼にいたときに茂呂山で知り合った女性が突然たずねて来た。そして、ニワトコ知ってますか?というので、よく知ってるよと言った。ニワトコなら茂呂山にもあるから、これから行きましょうということになった。時は夏を過ぎようとしていたので、今どき何するのだろうと思って聞いてみた。すると、母の病気をなおすのにニワトコがほしいのだという。薬草の本も持参していた。

ニワトコはスイカズラ科ニワトコ属に分類されていて、このほか高山には茎が短いミヤマニワトコ、花序の枝が長いナガエニワトコ、実が黄色くなるキミノニワトコ、もう一つ、変種のエゾニワトコがある。

薬用としては、解熱、利尿、おくみ、発汗、ねんごや打撲、神経痛、リュウマチに効くとされているが、素人は使用しない方がよい。春に葉が広がったとき、テンプラや煮物、炒め物として食べられるが、青酸配糖体を含んでいるので季節感を味わう程度にしておきたい。

その女性は青汁にして母に飲ませるといので声を出して驚いた。実のところ、やめといた方がいいと言いたかったが本を参考しているので量と、かなり工夫する必要がありますよとだけ話した。後に聞くと、飲ませたあと、すぐに吐き出したという。やはり、売っている青汁を飲むようにはいかないようだ。

薬用植物はたくさんあり、必要量をまちがえると危険なものもたくさんあります。特に服用する薬は要注意です。服用とは飲む薬のことです。

日本の漢方医学は、台湾などに比べると、まだまだ“おそまつ”ですが、それでも専門医にゆだねるのがベストです。要望があれば、台湾の漢方医の事情を紹介します。



## 余震はなぜ起きる

大きい地震が起きるたびに、専門家がテレビなどで地震のメカニズムを解説しているので、ここではふれない。各局すべてを見たわけではないが、余震がなぜ起きるかについては語られていないように思うからである。

巨大地震が起これば、必ず揺り返しである余震がおこる。大地は断層で切れている所もあるが、その面はつながっている。このため地震が起きれば、揺れていない隣に歪ひずみがたまる。大地は常に歪みのない元の状態に戻ろうとする力が働く。仕返しのようなもので、再び地震を伴う。これが余震であるが、歪みはすぐにはゼロにならない。これが余震が長く続く原因だ。地球の表面は海底でも地震が起こらない所はない。よく「昔から住んでいますが、ここは地震がないからいい所ですよ」という人がいる。だが、これがくせものである。地形により歪みがたまっていても、すぐに地震が起こらない所もあるので、地震がおきれば巨大地震となる可能性が高い。地震の被害は詳しく報道されているので、小さい揺れでも過敏になっている人が多いが、たまに揺れることで大地は安定する。日本列島は4つのプレートの上にある。太平洋プレートが沈み込んでいるので、接している別のプレートに歪みが生じる。この場合も、小さい地震が起こることで歪みが少なくなり巨大地震を引き起こす可能性は低くなる。最近、南海トラフなどいつ巨大地震が起きてもおかしくないと言われている。もちろん過去に起きた地震のサイクルも考慮されている。これには納得できる。なぜなら、小さい地震が少なすぎるからだ。

次は構造線についてである。断層で両面の地質が大きく異なり、大きいズレを起こしている大断層を構造線という。日本列島をまっぴたつに切る静岡・糸魚川構造線と、もう一つは西へ延び紀伊半島を横切り、四国・九州に達する中央構造線である。

航空写真を見ると中央構造線がここを通っているということは分かるが、いざその場所へ行くとさっぱりわからない。構造線のまわりには多くの別の断層がたくさんあり中央構造帯と呼んでいる。

このように多くの断層が集中している黒い所を破砕帯はさいたいという。いわゆるフォッサ・マグナである。発電を目的とした黒部第4ダムの建設のとき、陸路で物資を運ぶために道路が作られトンネルが掘られた。このとき突然、大量の水がふき出し大惨事となった。これは水を含んだ破砕帯が原因である。このときの様子は石原裕次郎主演の

『黒部の太陽』という映画に再現されている。大地は不動のものではなく、生き物のように動いている。「衣・食・住」は人が住むための3大原則であるが、土地を買い家を建てるのが一生のうちで一番高い買い物というのは、私の若い頃は納得できなかった。地球の歴史から見れば、人の命は1粒の雨のごとくちっぽけなものであるからだ。新築してわずか3日目に大地震にみまわれ、住めなくなった気の毒な人もいる。

### 地震は予知できるか

阪神・淡路大震災は朝早くにおきた。前の夜に六甲山にいた人が神戸の街が異様な光を発しているのを目撃したり、いろんな動物の異常行動が報告されている。このほか巨大地震がおきる前に地震雲じしんうんが出るという。飛行機雲のようなものもあるが、私には区別がつかない。中国では震兆雲霞じしんうんといい、欧米ではサンセット・プロブレムと言って研究している。元・奈良市長の故・鍵田忠三郎氏は『これが地震雲だ』という本を著している。岡山理科大学の弘原海教授わだつみは阪神大震災の予兆現象を多く集められた。このほか地震雲などの宏観現象に真剣に取り組む「日本地震雲研究会」があるが、多くの学者は非科学的だと首を横にふっている。各省庁はすぐれた機器を持っているが、縦割り組織なので得られた情報が伝わりにくいのは問題である。地震が起これなければ幸いであるが、非難の声も出るだろう。たとえ予知できてケイタイで緊急速報が流されても間に合わないだろうから、日頃からいつ巨大地震が起きてもいいように万全の備えをしておくかない。これが現状である。 (山口龍治)



山口氏の「ニワトコの思い出」に…

かつて某自然観察会に参加していた時、毎年春に「野草てんぷら会」というのがありました。たまたま遠方から植物に詳しい方が参加され、ニワトコの若芽をたくさん採って揚げておられました。私が「ニワトコにはシュウ酸が含まれているから、食べない方がいいですよ」と言うと、「そう言ったら何も食べられませんよ。山菜は何にでも多少くらい、毒があるのですから。」と答えられ、数人の方が食べておられました。後で一緒に参加された方から、お腹をこわした人がおられた、という話を聞きました。ニワトコは毒草辞典にも出ている立派な毒草ですよ。

文芸の効能

言葉は人を励ますであろう。時に言葉は人を悲しませ、人を苦しめるであろう。言葉を綴った文章もまた、人を励まし、生きる勇気を与え、時に人を悲しませ、苦しめるかもしれない。

時に言葉は人を絶望に追いやり、一方で言葉は人を幸せにする。過去どれだけの人が、人の言葉に動かされ、行動を起こしたであろうか。また一人の人が過去何度、人の言葉に動かされ、行動を起こしたであろうか。そして何人の人が、人の言葉によって命を救われたであろうか。反面、何人の人が、人の言葉によって、命を奪われたであろうか。言葉は人の心を動かし、その人の行動を左右することもしばしばである。歴史は人の言葉によって造られた、ということも言えるであろう。

学問は生活する知恵を与えてくれるであろう。一方で文芸は生きる力を、生きる勇気を与えてくれるかもしれない。文芸は人を愉快にし、人の心を育むであろう。時に悲しませることがあっても、そのことによって、文芸は人を成長させるのである。人の心の豊かさを培うのである。

ある文章を読んで目が熱くなる、というのはいかなる文章であろうか。それは当然、悲しい文章であり、感動的な文章であろう。さらにもう一つ、美しい文章に出会った時、やはり目が熱くなることはないだろうか。文芸とは文章による芸でもあるし、文章による芸術と捉えることもできるであろう。人は美しい芸術に出会った時、涙を流すものである。文芸は心を表現したものである。それゆえ、文芸は人の心を刺激するのである。

ことばは人の心を動かすであろう。人を悲しませることもあり、人をときめかせることもある。そしてその言葉を綴った文芸は人の心を養うものであろう。人を教育し、人格を形成せしめるものである。人は人によって教えられ、成長すると同様に、文芸によってもまた教えられ、成長するのである。

文芸の喜びの一つは、その文章に共感した時であろう。山に登ったことのない人に「山と溪谷」の「山に入る心」を読ませても、果たしてその人の胸を打つであろうか。自分が経験して感じていたことを、そのまま表現してくれた他人の文章に出会った時、人は共感し、感動するのである。反面、実際には自分の経験していないことについて書かれた文章に、自由な想像を付け加えて体験できるのも文芸の楽しみである。

(阿部良司)

『月報第43号』ありがとうございました。

次号以降の特集展開に合わせてとも思いましたが、ペン走るままに拙文送らせていただきます。

ところで高尾山頂の看板は立派ですね。敬遠して正解(?)でした。田部・木暮両先生を感じるには、おのが内奥の星の輝きを辿るしかないようです。

6月12日

追伸

①志鷹光次郎です。(←43号「志鷹光二郎」←42号「志鷹完次郎」)

②“巻頭言”中「平成の田部・木暮コンビ」(←43号「田部・小暮」)

追伸でご指摘いただいたとおり、誤字を重ねてしまいました。恥じ入る限りです。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第44号

2016年6月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

